

プラトン国家篇の研究

遠 藤 貞 吉

第五卷 四四九—四七二。

ソクラテスが理想とする国家の体制と個人の魂の構造と機能について語り了え、進んでそれ等に関する四種の誤について述べようとすると、アディマントスとグラウコンは婦人と子供の共有問題を詳しく説明せよと要求し、トラシユマコスもこの要求に同じる。

ソクラテスはこれは非常な難問題で、自分自身十分の確信をもつわけないと前置して語る。元來防護者は羊群を守る番犬である。羊を守るには雄雌の別はなく、只雄の方が雌よりも強いというだけである。それでこの仕事を果たするためには女性も男性と同じように育てられ教えられねばならない。即ち女も音楽と体操によつて教育されるのであるが、女殊に已に年のいつた婦人が裸で角力場において体操をしているとか、婦人が甲冑をつけ馬に乗るなどの事は実に滑稽と思われる。ところがギリシア人だつて少し前までは外国人のように裸体で競技する事を滑稽不徳とみていた。だが物を蔽いかくすよりか、赤裸にする方がよいとわかれれば、人は理性の教えるところに従つて裸体を滑稽とはせず、嘲笑すべきは不徳と痴愚で、美は善を以て計るべきことを認めるに至つた。ところで吾々の国家論のはじめに人はそれぞれの性質に應じて職業を営むべきであるといった事と、男女共に軍人となるべき訓練をうけるといふ事に矛盾はないか。決して

矛盾はない。頭の禿げた人々が靴屋であるからとて、毛の多い人は靴屋であつてならぬ理由はない、職業に係のあるような性質において異なる人が、異なる職業を営むべきであるので、婦人といえども軍人たるに適し、又智を愛する人々を選んで防護者たるの訓練を施すに何の不合理はない。吾々の計画する防護者の養成法は男性にとつて最善の方法であるとなれば、女性にとつても同様である。

以上で難問題の一つは解決された、第二の困難は婦人と子供の共有の問題である。この事の利益と可能の二つを論じなくてはならぬが、かの夢想家が自分の希望の可能性や実現の方法は念頭におかないで、その希望の達せられたときどうするこうするを夢想するよう、自分もまずこの共有問題の可能性はしばらくおいて、その利益を論じよう。

まず防護者たるにふさわしい男子が選出された事は已にのべたが、女子についても、防護者たるにふさわしいものを選び出し、男女共に生活させ教育する。そのうち人間性の必然によつて男女相結ばれる事になるが、防護者たる任務責任の上からは濫りな結合は許されない。凡そ犬にせよ馬にせよ、良種を作り出そうとせば良き雌雄の中から特別よきものを選んで結合させる。人間についても同じで、最も優れた男女はできるだけ屢、又劣れる男女はできるだけ稀に結合の機会を与えらるべきであるが、彼等の間に争を起さないように結合の機会の大小は只管籤のせいだと思わせるように工夫をしなくてはならぬ。こうした有益な虚偽は場合によつては許されるものである。又最良勇敢な若者はその功によつて、かかる結合の機会が多く与えられる。そして然るべき祝祭の日を選び、厳かな儀礼の下に結合が行われるのであるが、その数は支配者が前後の事情を考え、戦争や疫病の事など考慮して決定する。結合の結果生れた子供はすぐ母からはなして乳母によつて育て、母はいずれが我児であるかは全然知らされないで乳をのませる。結合は体力も知能も最盛んな時であるべきで、男は二十五才から五十五才まで、女は二十才から四十才までとする。しかし一定期間をすぎた後は自由に接触する事を許されるが、只男性はその娘及娘の娘、その母、母の母と結ぶ事は許されない。又女性はその息子及息子の息子、その父及父の父と結んでならぬ。そしてこの一定期間以後の結合によつては子を産んでな

らず、万一孕む事があれば適当に処置しなくてはならぬ。尚結合を許された男女も国家が定めた時日以外に結合し、又先きに示した年令前後で結合して子を産むなら、それは国からは認められない、神聖ならざる子として取扱われる。同じ日の結婚によつて生れた子供は、その父母に対して共同の息子娘であり、親は彼等の共同の父母であつて、一々の親子の關係は知らされない。そして子供同士は互に兄弟姉妹である。

右のような結婚の掟は如何なる利益があるか。抑国家が統一一致を必要とする時、そうした統一一致程大切なものではなく、分離難多程有害な事はない。人々の利害快苦が一致し、同一物について同じようにそれは我がものといひ得るような社会には完全な一致がある。人体のように完全な有機体では、その一部における苦痛は同時に全身の苦痛である。このような吾々の理想の国家では支配者は主人でなく救済者助力者であり、国民は奴隸でなくして、支配者の支持者養い親である。又支配者同志の間に敵味方の対立はなく、互に同僚である。又防護者達同士も互に親子兄弟姉妹である。この共同一致は彼等が吾身一つのほか自分のものとして所有するものではなく婦人と子供を共有する事から得らるるものである。かくして防護者は国家の救済防護の大任を果し、そのためには公共によつて養われ、その功績に対しては死しても生きていても、我身も子供も国民の尊敬をうける。もしかして彼等が吾權利を利用して一身の利益を計ろうとするなら、いみじくもヘシオドスのいつた言葉「全部よりか半分の方がましなのだ」という事を想い出すがよい。

ソクラテスは尚も防護者達がその子を戦陣の間に同伴して将来の任務のためにしつけをする事や、同じギリシャ人同士が誤つて争う事があつてもそれは内部の不一致で、外敵との戦争と異なるのだから寛容を以て対せねばならぬ等の事を論じていると、この結婚制度の利益はまず認めるとして、かかる制度は果して可能であるか、それを論証してほしいと促される。それで話題を一転する。

以上の婦人と子供の共有論は吾々として最も理解しがたい問題である。理解できないのはその共有によつて何か意味されているからでなく、ソクラテス（実はプラトン）^①がどれほど真剣にそれを考えていたかということである。それは

プラトンが不真面目に或は冗談にいつたと疑うのではない。真面目不真面目の意味では、それが実に真面目に考えられていた事は疑もない。只その事が果して実行できるか否かをどう考えて居たかの問題である。彼自身この主義が到底容易に一般的承認を得られない事を知つて、この説得のむづかしさを、人の上からおいかぶさつて溺死せしめる怒濤にたとえている。又一応の説明を以て片づけようとして、グラウコンにその詳論を求められ真に当惑したような口振りを以てあまり確信的にもいえないが等いつているのは、たしかに一方では諧謔であり他方では本当の心持でもあつたと思われる。ネットルシップは芸術的性格をもち芸術を喜びつつも、プラトンは芸術の与えるかもしれない悪影響を虞れて、理想国から芸術を斥けた如く、理想国の実現に寄与するような条件を助長するよりも、むしろその実現を妨げるような条件の除去に傾いて、婦人共有——それは家庭制度と私有財産制度の否定と表裏する——を主張したのだからと見ている。^②

プラトンは夢想家の心理を説明して、彼は自分の希望の実現の仕方を考えるよりもむしろはや希望が実現されたかの如く感じて、楽しんで空想に耽つてゐるといつているが、プラトン自身彼の意図の実現可能を当時の現実或はそもそも人間の本態から考えてみる事よりも、じかるべきものと理論的に考えるに急いだという事はなかつたであらうか。且つ現代人が考える程奇怪に感じる事もなかつたかと想像される。当時の都市国家といえは強大国でも十萬を大して超えなかつたといわれる。自由民はその中の十分の一内外にすぎず、防護者として選ばれるのはその中の小数であり、年令にも制限があつたとすれば、所謂「共有」に關係する男女は相当少数人数であつた事、もとより奇怪の感を免れないが、今の国家とは比較にならぬ事は事実である。

当時ギリシアの文化は最高頂に達した前後である。思想や芸術の高さは今日からみても甚だ高い事を認めなくてはならぬ。然し内容的には今日の複雑巧緻に対し簡單素朴といえるであらう。素朴という事は必ずしも鈍感愚鈍という事ではない。むしろ物の本質はそれを把握している。複雑はややもすると混乱となり、悪ずれしひねくれる、(ソフィステイケートの語が適當する)、性や性欲についての見解も當時は今日に比べて甚だ公開的なおおらかな態度が濃厚にあつた

であろう。防護者の間における男女の結合を禁じた条件にも原始的信仰の名残が認められる。それ故婦人共有について現代人が抱くような道徳的評価は当時のギリシア人には期待できない。のみならず、共有の語が想像せしめるように、婦人共有は婦人を物としてみているのでは決してなく、プラトンは防護者の仕事については男女間に本質的には差異はない。ただより強いとより弱い、差があるだけといつてさへ居る。

防護者階級の結婚が優生学的見地に立つ点においては、もしそれが国家の強制によることと、集团的に行われるという事を除けば、今日においては常識となつてゐる。最後にプラトン自身が一生涯独身であつたということと結婚制度と多少でも関係があつたかどうかと思うことはあまりに空想に走るものであろうか。

しかしこの結婚制度についてはいろいろの疑問が残されている。先きに国民の資質を金銀銅を以て形容し、大抵は同じ性質の子が親より生れ出るが、もし親以上のもの、以下のものが生れるなら、それぞれ本人の資質によつてその処を得しめるべきであるといつてゐるに拘らず、この結婚制度は上流階級にのみ適用され、又下層階級のすぐれた子弟は如何にして防護者教育の中にとりいれられるかについては一言もいわれていない。又子供を産むに適していると定められた年令に先立ち或はそれに遅れて子供をもうける事は正当でないと戒められつつ、一定年令を経過した後男性は或る制限以外には自由に女性と接触する事を許されている。尤この場合子供を産むことは避けるよう勧告されているのだから、この二つの場合必しも矛盾するのではないかもしれないが、この二つの場合について語る調子には何か一致しないものが感じられる。

防護者の教育に関するプラトンの主張からして、最近彼に対して苛烈な批判が加えられている。それ等の批判に対し弁護論も公にされている。^⑨然し私は今日までプラトンが占めてきた思想界における王座にゆるぎはないと思う。但し法王無謬説のような考えを以て彼に対する人もあるまい。

尚国家篇をはじめプラトンの対話篇を教養書として一般の青年達にすすめたい一つの理由は、くどくどしいような議

論の進行中に、氣をつけているといろいろの重要な問題が示唆されている事である。たとえば今のこの議論の間にも争論と公平な議論の別を説いて一つの問題を論究するに、それを様々の面に分けて考究しないで、陳述の中の言葉の矛盾を捕えて議論するのでは、自分は推理しつづがあると考えていても、実は争論しているにすぎないと教えている。又ギリシア的な考え方として常にあげられるところの「美しいから善である」と同種類の考がこのあたりに散見する。例えば「美を善の規準以外の規準を以て測ろうとする愚人」^④とか、この制度の効用と可能とは、その議論の自己一致がそれを証する」^⑤とか、「最益になる事は神聖と見なされる」^⑥等の言葉がある。

第五卷 四七二〇—第六卷 五〇二〇

吾々が先きに絶対の正義や絶対に正しい人等の事を話したのは、そうしたものが実在するといっているのではなく、それに照らし合せて、吾々の間でそれに最も近い人の運命も、それに最もよく似ている事を知るだけであつた。画家が完全に美しい人の像を描いて、そうした人の実在を証明し得ないというので、その画家の技倆がまずいといえるか。吾々は理想国家を想像の上で作rittつあるのだが、吾々の理論はかかる国家の可能性を証し得ないので、劣れる理論だというのであるか。

凡そ概念は事実において十分に実現されることはない。行為は言葉ほど十分に真理を握むことができない、それ故現実の国家が凡ての点で理想の国家に合致することは望めない。吾々は現実の国家が理想の国家に大体近いならそれで満足する。そこで現実の国家において何が悪政を導き出す原因であるか、又最小の変化によつて現実の国家をよりよくするには、どんな変化があるかを明にしよう。恐らく凡ての人には信じ難いであろうが、哲学者が王となるか、或は王が哲学を体得して、政治的の偉大さと英智とが一個の人間において結合されるまでは、国家から諸の害毒は取り除かれない。

抑々哲学者即愛智者は知恵の一部分でなく、知恵の全体を愛するものである。單に物を知りたがるとか好奇心が盛んというのでは愛智とはいえない。たとえば美しい事物についての感覚をもつことと、美そのものの感覚をもつことは別である。美そのものの認識に導こうとしてもそれについてゆけない人は美そのものを知らない。そういう人はものの写しと本物を間違え、互に似て居ないものを似ていると思ひこむ人、即夢をみている人である。これに對し美のイデヤも、このイデヤを分有する事物を眺める事ができ、この兩者を混同しない人は目を醒めている人である。これは知識の状態である。知るとは何か実在するものについて知るので、全然存在しないものについては知るといふ事はあり得ない、知識は実在するものに相応じ、無知は実在しないものに相応する。ところが、純粹の存在と、絶対の非存在の間に、存在するといえ、存在しないとも云えるものがある。凡て美しいものも何か他の立場から見れば美しくないものである。大きいものも別の立場からは小さい。それ等は美しいとか大きいとかであるのか、或は美しくない、大きくないというのであるか。それとも美しくもあり美しくもない、大きくもあり大きくもないというのか。或は又美しくもない、美しくなくもない。大きくもない、大きくなくもないというのであるか。とにかく本當の存在と非存在の間に、ありてあらぬものがある。これを対象とする作用は臆見である。多くの人は美しい幾多のものを見る。然し美そのものを知らない、美はいろいろの程度仕方で見られるか本質において一である事を知らない。然し真知の人は仮相の下に永遠に變らぬ一なるものを認識する、それが眞の愛知者であり、哲学者である。哲学者は凡て事物の眞実相を洞察し、事大小となく眞を愛し、故らに虚偽を許すようなことはしない。一体經驗の教える所によると人間はその欲求が或る一方に強く向うと、それは他方においては弱いものである。眞に學問を愛し、精神的の快感を求める人は、金錢やその他物質的又肉体的欲求を追わない。神的なものにせよ人的なものにせよ。部分に捕われず、その本質、その全体において、それを把握しようとする哲学者からこの世を見れば、眞にはかなくあさましく、今更死を怖れさける事もない。卑怯下劣でなく、羨まず誇らず、その行動不正苛酷を犯す事のない、記憶に長じ又俊敏な人間が、修養と年令とを重ねた後には始め

て国家の事を彼れに託する事ができる。

このときアディマントスがソクラテスに向つて、彼のいうところをきけばきく程納得がいきかねる。もし人が青年時壯年時通して哲学の研究に耽るなら、結局奇怪な人間となつて、一番ましな人間でも世間の役に立たない。これは凡ての人が言い、又信じている事である。という、ソクラテス自身もいかにもそうであると肯定する。アディマントスは、それでは一方に哲学者が国家を支配するようにならなくては、国家から諸悪は除去されないと主張しつつ、他方哲学者は国家にとつて何の役にもたないという矛盾はどうした事かとなる。ソクラテスは、今国家において最善き人がいかに悲惨に取扱われているかを見ると、世の中の何にも比べようがないので、只譬え話を以てその間の説明するほかない、と前おきして譬え話をする。

一艘の舟が船主をのせて航海している。船員は各自分が舟を自由にしたいと思い、反対するものは海に投げこみ、味方になるものは何とか美名をつけてとりこむ。そして船主は酒とか何とかで甘くまるめこみ、我物顔に振舞つている。このような船の中では、本当に舟の事も心得、天文気象にも通じた真の舟乗は夢想家とか無能者とか饒舌者とかそしられて構いつけられない。国家においても同様で、支配の能力のない野心家が巾をきかせて、真に支配者たる値のある人に国家の支配をたのむ者が居ない。病める者が医者に医療をたのむべきで、医者から患者に向つていやされるよう求めるのでないように、真に支配者たるべき者から、自分によつて支配されよと要求すべきではなからう。ところが哲学者に対する非難も亦本当である。こうした私の議論から眼をはなつて、現実の哲学者を眺めるなら、殆どのものが墮落しているのを認める。それは如何な理由によるか。

植物でも動物でもその種子が氣候や土壤や養分について欠陥を感じる事は、それ等がすぐれた種類であればある程大きい。同様人間も天分の豊かな程誤つた教育から受ける害は甚しい、弱い精神は大きな善もできないが、大きな悪もできない。哲学者は先きにのべた如く幾多の長所を具えて居るだけに、そこなわれる機会も多い。青年達が如何に教育さ

れているかを見ると、所謂ソフィスト達が謝礼をとつて教えている。ソフィトの中の最大なるは輿論である。種々な集会の席上、のべられた意見に対する轟々たる賛成反対の怒号をきく青年は只大衆の氣勢におされ、これに従うのほかなきを感じる。しかも彼等は言論の力の及ばぬ所は権利の剝奪や財産の没収や死刑の宣告を以て補う。かくて大衆の好むものが善であり、大衆の好まぬものが悪である。正義高潔が必要だと想像はしても、その本質を見たこともなく、その説明もできない。徳の涵養には輿論ほど有力なものがないが、彼等によつて教育された性格の下劣は当然である。かかる人間共に哲学者が喜ばれない事勿論である。人々は将来哲学者となるような優れた素質をもつた青年を見出すと、他日彼を利用するつもりで、そのような青年の歛心をむかえたり、氣に入る事をいつたりして増長させる。そこにかかる青年は他人の諫言など耳にはいらない。もしかかる有望な青年が困難誘惑を排して研究修養に精進すると、今度は人々は百方手をつくしてこれを妨げ抑えようとする。こういうわけで哲学者たるべき優れた素質のために、哲学者となりそこねたり、又なる事を妨げられる。偉大な人は国家にとつて大きな利益をもたらすものであるが、又却つて大きな害をなすこともある。こうして哲学は自分が吾子とたのむ者には見捨てられ、下らぬ者共がその代りに哲学の中に入つてくる。ここから詭弁猾智も生じる。今や本当の哲学を追求するものは少数しかない。そのような人は実際の世間や政治の乱れと汚れにあいそをつかして、自分のみは濁に染まず正しく生きて、早くこの世を去りたいと願う。彼等も何か立派な事はするだろうが、實際は、彼等に適合する国を見出してこそはじめて国家のためにも、自分のためにも最も立派な事ができるのである。

今日の実際を見ると、人はやつと少年期を了るか否かに、そしてまだ金儲や家政などをやらないうちから、哲学に手を出ししかもその最も困難な部分、即ち推理などを学ぶ。それから片手間の仕事のつもりでいて、老年になつてそれを止めていない人というのは極く少い。然し少年時代には少年時代にふさわしい修養をすべきで、主として身体の練磨を計り、後の哲学にも役立つ備えをし、知性が成熟すれば精神を練磨し、政治軍事の務を果す元氣もなくなれば、自由に

生活し許された幸福を樂しむべきである。世人は吾々が今まで語つて居たような国家の實現されたのを見た事もなく、眞剣に眞理を探究している哲學者の心も知らない。しかしかような哲學者が国事に当るか、或は王たる人が哲學的精神を鼓吹されるまでは、国家も個人も幸福を味うことはできない。かかる国家の實現は成程困難ではあるが不可能ではあるまい。民衆といえども眞の哲學者が眞實如何なものであるか、自分等のため何をするかが理解できれば、彼等を憎むものでない。如何に眞の哲學者が迫害されるとはいえ、王たるものの子にして哲學者の素質をもつた凡てのものが倒されてしまふとはいえない。もしそのような人が一人でもあれば、国家を支配し今までのべたような国家を實現する事ができるだろう。^⑩

プラトンの理想的國家の可能についての議論は甚心細い議論のように見える。支配者と哲學者との結合が或る特別な場合に實現されるだろう。決してないとはいえないといったような蓋然度である。そのような議論を弁護するのでなしに、考えられる事は、人間生活において、かような可能性の問題が常にある、という事である。凡てそれ程の高い理想でなくても、それが人生或は社會に實現される事は事實全く不可能であるに拘らず、尙實現し得る如く行動せざるを得ない。という事は屢々ある。學生の社會から試験不正を除き、政治家の間から賂賄、託請、横領をなくすること、學者が私心なく眞理を追求することなど、個人々々について考えれば決して不可能でないけれど、實際は絶対不可能らしい。しかし、我々は比較的少數の不正漢不心得者のある事を度外において實現可能を信じて、努力している。又全く空想的と思われるような理想國家についての構想も、已にのべたギリシア都市國家の極めて小規模な事を考えなければならぬ。現在吾々の社會に政治的に或は道德的に向上改善を計る場合まづ、家庭、隣保、職業的團體、同好者の團體、地域団体等小さい社會を基として相互理解と同感の上に固い協力を計り、それ等社會が又相互に連繫、國家として團結し、更に宗教、芸術、學問等を通して超國家的に協力し、小地域や團體の分派的利己的精神を抑えるという仕方、少しでも多く目的が達せられはしないか。今日でもそうした結合は部分的に行われている。それを有機的に結合するよう

計る事はできないものであるうか。

第六卷 五〇三 a—五一 e.

已にのべた事をくりかへしつつ、防護者支配者の教育について語り、イデアの認識を論じる。⁽¹²⁾

一国の支配者となるべき人は、俊敏記憶力聰明器用等仲々一つ身には兼ね備えがたい諸長所を併せ持つ上、元氣寛大な性質をも具えなくてはならぬ。しかもこうした諸性質をもつ人はとかく堅実さを失い常執を逸しやすい。さればとて安定堅固な人はとかく緩慢鈍重である。このようないろいろの条件を具えているか否かは、年少時から年長じるまで一貫してこれを觀察し、快樂にも苦痛にも、困難危険にもよく確信を保持するか否かを確めるのみならず、各種の知力についても十分の能力があるか否かを調べなくてはならない。

抑も善のイデアを認識する事が最高の認識で、他の凡てのものはこれによつてはじめて有用となる。如何なるものを持たうとも、善きものを持たずしては持つ価値もない。凡ての思想を包蔵する聰明も、善についての思想を欠いているなら何の価値もない。一般民衆は快を以て善と思つているが、快の中にも善と惡とがあるのだから、一般民衆に従えば快は善であつて又惡であるという矛盾に陥る。又少しましな人々は知識を以て善だというが、知識にも善の知識もあり、他のものの知識もある。善といえど何が善かわかつているつもりであるが、このように実はわかつていない。多くの人は正しいとか美しいとかについては、本当に正しくなり、美しくならないでも、正しいもの、美しいものを為したり、所有したり、そうであるように見えればそれで満足している。しかし真に善を欲する人は、善を目的として追求し、善のあることを期待しつつ、しかも他の事柄のようにこれを確証するものがない。支配者たるべきものは実にかか

る善について明らかな認識をもつていなくてはならない。
実は私は善の本質については明確には知らない。然し善に最も近いもの、云わば善の子供についてできるだけ分るよ

うに説明しよう。一体世の中には多くの美しいもの、多くの善いものがあるが、美しいというその事、善いというその事は一つである。多くのものといわれているものを、唯一つの概念に包摂したこの統一者を真にあるところのもの、実在という。この統一者は眼には見られないが、理性では知られる、これに反し多なるものは眼には見えるが、理性で知られない。この統一者をイデヤとよぶ。さて耳が音をきき、声がきかれるためには第三者の仲介を必要としない。しかし眼が見、物が見られるためには、第三者の仲介が必要である。即ち光が必要である。光の源は太陽だが、太陽は視力を作り出すもので、視力によつて認められる。視力は太陽を離れないもので、云わば太陽の子供である。さきに善の子供といったものは、丁度この太陽の子供とよぶものに相当するので、可視界において太陽が視力と可視的事物に対する関係は、可知界において善が、精神と精神的なものに対する関係に当る。眼自身には明るさはなく、月や星の光ではおぼろにしか見えない。同様に魂も真理と存在の照らすものは明白に認めるが、生滅去来するものについてはこうも思ひあおも思うというように、憶見しか作れない。知られるものに真理性を与え、知るものに知る力を与えるものは、善のイデヤである。善のイデヤは学問と真理の源で、認識によつて把握されるけれど、真理や知識とは別もので、それ等よりも一層美しいものである。太陽は凡て眼に見える事物の可視性の原因であるのみならず、産出養育生長の原因であるが、しかし産出そのものではない。同様に善は知られるものには知られる力を与えるのみならず、存在をも与える。しかし善が即ち存在というわけではなく、遙かそれに優るものである。

今一本の線を二部にわけて、その中の一つが可視界を現わし、他の一が可知界を現わすとする、可視界を更に二つに分けて、その一つは事物の世界、もう一つはかかる事物の影又は写しとする。それに相当して可知界も二つの部分に分れる、その低い部分は事物の影或は映像を心像として用いて、仮定に基いて探求を進め、原理でなく結論に向つてすすむ。たとえば数学者は奇数偶数、図形、三種の角等の仮定から出発して、整合的に結論に達する。その間可視的な形を用い、それについて推理するが、彼が念慮においているのは、かかる可視的なものに似ているイデーであつて、それは精

神の眼で見られる。精神の高い部分では仮定を仮定として、これから出発し、理性自身が弁証法によつて、仮定を踏石として、それ以上の世界に入る。以上の四つの部分に對当する能力は低いものから順次にあげると、知覚、信憑、理解、理性である。

ソクラテスは當時の若者達が年若くして哲学を学びしかも最も難解の部分を学びながら、その時期を了ると探求の熱意もなく、他者の言説に支配されていると批評し、又支配者の教育において哲學的探求をむしろ最も後の仕事としている。この事や彼がその理想国から文學藝術を遠ざけている事を思い併せて、現代の問題にふれてみたい。たとえば大学の一般教養における「哲學」の問題である。それは講義者の深い信念固い思想より出て、聴講者の心を動かし、彼等の人世觀処世觀に作用する場合もあろう。或は講義者自身の信念は直接表示しないで、只物事を觀察しそれについて思考する種々の角度のあり、しかも人として誠実な真理の探求者であるべきを説くに専ら努力するものもあり、或は一つの地域の鳥瞰図のように一般に哲學について親切な手引を与える人もあろう。その他哲學教授についてどのような方法態度がとられようと、その方法の難易や効果の得失について、長短共に伴っている。今日の大学生(昔でも同じであらうが)の程度では、一度教えられた思想傾向に決定的に支配される者が多いだろう。もしそうした思想を是認しない人からみれば、それは願わしい事と考えられるか。自然科学については比較的公平な態度がとりやすいが、哲學等思想的の學問や社会科学においては、個人的信念希求に強く影響され易く、又当然影響されるべき面もある。ソクラテスが子供の発達程度に應じて教育の内容方法を考えなくてはならぬ事を主張すると共に、哲學の研究を最後にしかも年長して後においたのにはこうした理由も想像できる。

政治教育についても同じ問題がある。如何なる政治形態が望ましいか、又現實の政府や政黨の政策や行動の是非について國民は自由に考え主張することができ、又無関心であつてはならない。教師として具體的な政治的態度や批判を表現しないで居れぬ場合も少くないだろう。然しまだ十分に思考反省の力の發達して居ない少年青年が、教師から特殊の政

治的思想態度に感化影響されて、一つの型にはめこまれて容易にこの型から脱出できないというのも問題である。各自の良識とか良心に訴えるという事は甚だ便利な言葉であるが、実は甚心許ない事である。それに拘らず教師の良識に委ねるほかならないような事柄が少くない。

逆に政治担当者が教育を利用しないかどうかの問題もある。政治担当者の異なるに従つて国の教育の方針方法が変るなどの事は絶対に避けるべきである。民意によつて定められた国是の変らぬ限り教育の根本方針を動すべきでない。かりに極左極右が暴力を以て政權を握つた処で、教師が良心的に彼等の方針を認め得ないなら、たとえ彼等に監視され強制されつつも、且つ必ずしも彼等と正面衝突をしなくとも本物の考え方は教える事ができ、それはいつかは具体的行動となつて表出される。ガリレオが法王庁で審判をうけ、地動説を口にしないと約束しつつも、「でも動く」と自然に信念が表白した如く、真理はおとなしくしかも強いものである。

プラトン（ここではソクラテスというよりも、プラトンという方が適當なのであるが）は国家篇（他の對話篇についても同様であるが）において彼のすぐれた芸術的資質を示している。彼がその理想国から芸術家を遠ざけた事は、芸術を教育的観点からみていることを示している。芸術は勿論芸術として評価されるべきであるが、人間が社会生活を営み社会には教養の程度を異にする無数の人、年令の異なる多数の人が同時に生活している以上、芸術を教育的立場から見ると必要な場合もある。芸術にすぐれたとされる作品が教育的立場から斥けられる事のあるのも止むを得ず、又必要な事であり、教育的には、推薦しかねるから、そんな作品は陋劣ともいえない。しかし本来にすぐれた芸術は何かの仕方人間を深め又は高くするし、人間を本當の意味で下劣にするような芸術が、芸術的に価値ありとは思えない芸術のための芸術と人生のための芸術、真理のための真理と真理の効用というような対立は、私には調和のできぬ絶対の対立とは思われない。

第七卷 五一四 a - 五四一 b

話は洞穴の譬に移る。

感覚界に住む人は云わば洞穴に閉ちこめられている人である。彼等は洞穴の中に鎖でつながれ、後を振向く事もできず、幅の広い入口を背にして壁にむいたまま坐っている。入口よりもずっと外の方に火が燃えていて、人は入口の外側を通る人や持物の影が壁にうつるのを見るきりで、隣にいる人さえ、その声は聞いても姿を見た事がない。このような人が解放されてはじめて外を眺めて、今まで影ばかりみていたその実物をみても明白に眼に入らず、むしろ元みた影の方が確のように思われ、^⑧火を見ても眩み痛みを感じるばかりである。彼はまずなれなくてはならぬ、眼をまず陰影から、物に映った姿に、それからその実物に、終に天界に眼をむける。はじめは只月や星をはつきり認め得るのであるが、最後には太陽をも見る事ができるようになり、太陽が一切の存在の根源である事を知り、はじめて今の我身の幸福を自覚する。天上界は可知界である。肉眼が光から闇に、闇から光にきた当座は物も見えない如く、魂の眼も可知界から感性界に下り、感性界から可知界に上つたしばらくはとまどうものである。

元来の盲目に視力を外から与える事のできないように、魂にも外から真知を押しこむのでなく、元からその可能性があつたのである。又眼は闇から光に出るにしても全身と共にでなくばそうできないように、認識の働も魂の全体と共にでなくば、生成変化の界から不変存在の界に上ることはできない。視覚は本来肉体の具有するもので、只誤つた方向を直す事はできる。魂についても英智そのものは固有のもので、只転換によつて有益にも有害にもなる。悪徳者の狡智も幼い時から、彼を生滅界にくくりつけいる貪吝から彼を解放して、彼を反対の方向にむけてやるなら、狡智として働く同じその智慧を以て真理を認めるようになる。もし真理について教育されず真理を知らないなら、かかる人は公私の行為の規則たるべき義務の純一なる目的をもたない。又もし教育を只あてもなく延ばしているなら、そのような人は強

制しなければ行動しない。いづれも国事を託する事はできない。

しかし真理の諦観に到達した人は祝福の境地に居るので、このような人を現実界に呼び出し煩しい政治の事に当らしめるという事はそのような哲人達にとつて不当な仕うちでないかの疑問に、ソクラテスは答える。

抑理想国の法律は凡ての階層に亘つての幸福を実現することをめざし、或特別の階層が他の階層よりも幸福である事を許さない。哲学者には卑しい政治的野心がない。彼等は義務として政治に当つてゐるのである。それ故今の支配者の生活よりも幸福な生活を未来のために用意しておかねばならない。¹⁴

進んで哲学者の教育についてのべている。感覚の対象に二種ある。たとえば指を見て指と知るように感覚だけで十分判断できるものと、その指の大きい小さいの如く、大きいともいえるし、小さいともいえ、結局理性の判断をまたねばならぬものである。實在を認識するには理性によらねばならない。

一般に術は人々の欲求や臆見に關係してゐるもので、それによつて眞實在を知る事はできない。諸種数学は實在について何かを把握しはするが、云わば實在について夢みてゐるので、それ等諸学が用いてゐる假定をそのままにしてこれを説明し得ぬかぎり、實在を本当に知る事はできない。理性は数学を助けとして實在を認識するので、弁証法、哲学に進む準備として数学を修めなければならぬ。支配者たるべきものはこうした高等教育をうけた上、¹⁵悟りが早いとか記憶がよいというような天賦をも兼ね備えてゐなくてはならぬ。ところで現代の哲学研究者の誤は、哲学を修めてもそれを天職とする自覚がない事である。体育を好んでも研究を好まず、研究を好んでも体育を好まない人、有意的の虚偽を憎みつつ無知等のような無意的虚偽に陥つてゐる人は哲学にむかない。

さきに哲学は年長して後に修むべきものといったが、それは時弊に激しての言葉で、年少時代こそ大きな又屢なる勞苦にも耐えるので、進んで哲学を修めようとするなら、年少のときそれを修めるがいい、然し決して強いてはならぬ。体育は或は強制的にも行えるが、精神的努力は強い事はできない。教育は楽しんで行われねばならぬ。そうして、そ

自然の性癖も知られるのである。学問は体育の時期が終つて始めるが、体育の如何が大切な検査の一つである。二十才で学力の検査に合格した人は更に高い教育をうけるが、年少のとき秩序なく学んだ事柄は今や整理組織されて、真の学問とならなければならない。包括力とか弁証法とかはかうした際に働くものである。学問軍事その他の事柄において堅実なものは三十才をすぎて再び選考されて、更に高い地位におかれる。

今日弁証法の研究者は年少時代家庭で正義等について或原理が教えられ、親の權威の下に養育されて、好ましくない習慣等が彼を誘惑しても、正義の観念をもつかぎりそれに動かされる事はない。しかし詭弁を以て彼が今まで教えられてきた事の真実性を疑わしめられ、それかといつてそれに代る確信ももたないと、彼は主義節操もなくなつて、放恣な生活を送るようになる。そこで三十才にして弁証法を学ぶにつけ、あまり年少で議論や論理を弄んで、それが面白くなると終には信念を失うようになることを警戒すべきである。年長して後はこうした心配もなくなる。哲学を修めた後はこの諦観の天上界から再び現実界に下りてきて、時勢におくれず、又如何なる事にも恐れずひるまぬ修養をつんで十五年間を送り、五十才になつて政治に当るのであるが、それも偉いわざとしてでなく必要止むを得ぬ事として勤める。そして立派な後継者が出来たならはじめて退隠する。このことは婦人についても同様である。

他の多くの個処においてもそうであるが、この洞穴の寓話においても教育の真諦にふれた言葉を至る処に見出す。たとえば眼が光から闇に、闇から光に出るとしても、眼だけというわけに行かない、全身と共にでなくてはならぬということは、国家篇の始にもあつたが、頭痛を医すことから、病を直すのは身体の一部の問題でなく全身の問題であるというのと同じ主意で、知的意志的感情のいずれの陶冶でも、習慣態度の養成でも、それは常に人間形成の立場から考えられねばならぬことや、教育課程における一般的教養と専門的教育の關係等皆同じ思想の上に立つている。

又年少のとき学ぶことは秩序がない。年長してこれを整理組織して体系的知識にするという考えは、課程や学習においてはじめは専ら心理的であるべく、然し次第に論理的要素を増して行くべきである。或は生活学習とか経験学習とい

った形が低学年でとられ、高学年になれば学問的研究に近くなるという事に現われている。

註

- ① プラトン対話篇におけるソクラテスの言葉が真にテクラテスの言葉であるか、又はプラトンが彼の口をかりていつたものか等の問題については、この研究の第一回の註において論じてある。
 - ② R. L. Nettleship, *Lectures on the Republic of Plato* (Macmillan, London. 1929) Ⅲ Communism and Digression on Usages of War 特にその初めの部分
 - ③ Ronald B. Levinson, *In Defense of Plato*, (Harvard University Press, Cambridge, 1953) 1. The Attack on Plato. プラトン非難者の主なものとして John Jay Chapman, Lucian, Plato and Greek Morals; R. H. S. Cressman, *Plato Today*; Warner Fite, *The Platonic Legend*; K. R., Popper, *The Open Society and its Enemies* (の最初の部分) をあげよう。
 - ④ *Republie* 452, d.
 - ⑤ *ibid.* 457 b.
 - ⑥ *ibid.* 458 e.
 - ⑦ 前これらの考え④⑤⑥に似た言葉をボアンカレの「数学的創造」の中に見出す。それは *The Creative Process*, ed. by Breuster Ghisselin (*Mentor Book*) の中に収められているが、この書は高い教養を求める一般の方々にすすめてもいい本だと思ふ。
 - ⑧ このような厭世的な傾向は彼の本質的素質はともあれ、彼の近親者の関係した当時の政治の紊れ。尊敬してやまなかつた恩師ソクラテスを殺した政治家の暴逆、数回に亘るシラクーサイにおける彼自身の活動の失敗等により少からず助長されたと思ふ。
 - ⑧ プラトン対話篇における神話については、たとえば形而上学の問題が常に神話の形をとつて居る事が指摘され、議論の上の単なるあやでないことが論じられている。相当過去筆者もこれに関する議論を紹介した事がある。
- Parceval Frutiger, *Les Mythe de Plato*, Felix Alcan
Karl Reinhardt, *Platons Mythen*

この話は単なる寓話で、それを用いる理由も明らかに示されているが、さきにプラトン、或はソクラテスにおける類推について私見をのべておいたように、類推、比喻、寓話等は只修辭的な立場から用いられるとは限らず、實際議論を進める上にも、それが便利であり、必要でさえあるが、しかし同時に危険も伴うことをのべておきたい。

徳性の涵養における輿論の力は結局教育における環境の力を用いるもので、プラトンには環境の教育力を指示した個所が多い。プラトンの国家は明らかに階級社会であり、彼の政治論國家論は特權階級本位であると非難される。しかるにここに（四九八a）にまだ金儲や家政をやらないうちからの言葉があるのは甚意外の感がある。彼の國家篇も定説に捕われずして、素人の眼を以てよみ又考ふる事は無意義ではなからう。

⑪ この論法では理想國實現の可能性は絶無ではないというに止るであらう。

⑫ イデヤの認識については、さきの芸術論と同じく、何かの機会に改めてこれをとりあげて詳しく論じたい。

⑬ 宗教的の見方と世俗的の見方、一身の利害に捉われた考え方と人道的立場の考え方の關係も同じ事である。程度の相違でなく次元の相違である。

⑭ プラトンの國家は只特權者本位のものとして一口に批評し去ることはできない。彼等はむしろ世俗的な歎びや幸を捨てて、一種の犠牲献身的な立場に身をおいている。それは彼の立場からは自ら認めて祝福とする境地かもしれない。しかしそれ故に彼等哲学者のための國家という事はできない。又彼等のために幸福の境地を用意するというものの、その内容とか状態について殆ど具体的には何もいわれず、世俗的には極めて抽象的な空疎なものである。

⑮ これは自由教育の思想の源となつてゐるもの、教育課題の改造につき、自由教科の意味価値について、時代々々で検討を新にする必要はないだろうか。

Endo, Teikichi

Study on Plato's Republic (continued)

Résumé

V. 449—472. After giving a gist of Plato's idea on the community of women and children, the writer comments on the idea. It may be absurd, but ouget not to be regarded as immoral. Points to be taken into consideration are, 1) Plato was well aware of the sacredness of marriage, 2) the ancient Greeks' view of sex may have been crude, but not sophisticated, 3) the number of the élite of the Greek polis must have been very small, and perhaps 4) Plato had never married.

V. 472b—VI.502d. Possibility of such an ideal state as planned by Plato. This problem reminds us that any attempt of improvement in society of any kind and any size cannot not be fully realized, and yet we must work as if full realization is possible.

VI. 503a—511e. Education of the guardians is treated of. Brief explanation is given by Socrates of the two worlds, the visible and the intelligible, and four grades of cognition, sensation, belief, opinion and true knowlege. Socrates suggests the study of philosophy should not be began too early.

VII. 514a—541b. The fable of inhabitants of a cave. The so-called new ideas in education are to be found in many parts of the dialogue, especially in this chapter.